

## 神崎市におけるインバウンド観光の新たな可能性 ー日本在留外国人を対象とした調査からー

九州産業大学地域共創学部 教授 大方 優子

### 1. はじめに

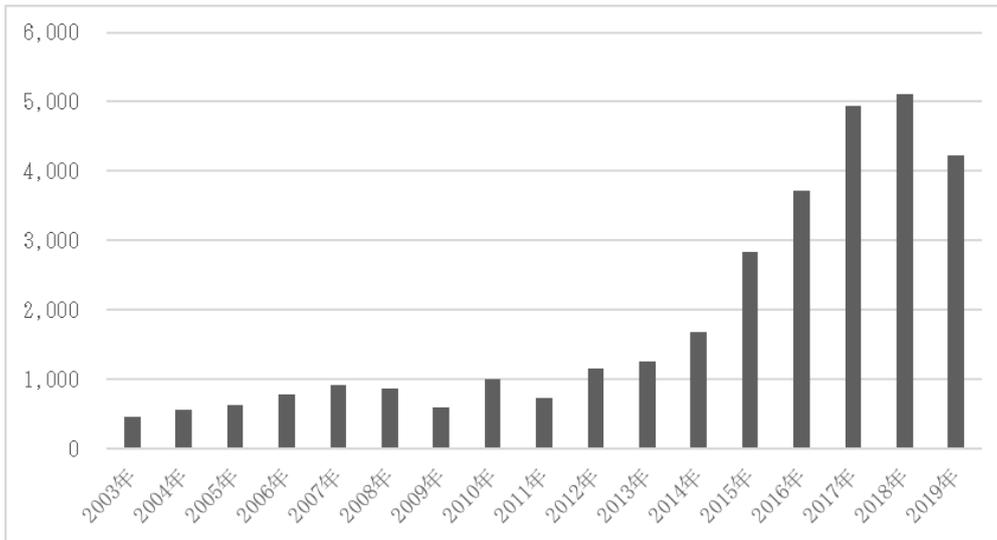
日本を訪れる外国人旅行者数は2019年に3,188万人に達し、2013年以降連続で過去最高を更新し続けている。それに伴い九州への外国人入国者数も近年増加傾向が続いていたが、2019年は422.2万人、前年比マイナス17.5%と8年ぶりの減少となった(図1)。これは、日韓関係の悪化や中国からのクルーズ船の寄港回数の減少などにより、九州へのインバウンド市場の大半を占める韓国、中国からの入国者が減少したことが大きく影響したものとみられている(国土交通省九州運輸局、2020)。2019年における九州への外国人入国者数の地域別内訳をみると、韓国が40.4%、中国31.5%、台湾10.9%、香港7.6%の順となっており、東アジア地域で全体の約9割をも占めていることがわかる(図2)。2020年現在、新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、世界中で一時的に観光旅行者の動きがストップしているものの、今後感染が収束すれば、観光旅行者の動きは再び活発化することが予測される。その際、九州のインバウンド市場を再び拡大させていくためには、これまで大きく依存していた東アジア圏以外の層を開拓していく必要があるだろう。九州観光のマーケティング及びマネジメントを担う広域連携DMOである一般社団法人九州観光推進機構においても、九州への来訪促進戦略の重要項目の1つとして、近年は東アジア圏以外からの誘客に重点を置き、ASEANおよび欧米豪からの誘客拡大にむけた積極的なプロモーション活動等を展開している(九州観光推進機構、2020)。また、特に現在のコロナ禍によって多くの国内観光地が深刻な打撃を受ける中、特定の旅行者市場に依存するリスクに対する認識が高まっている。このようなことから、今後の九州観光において、東アジア圏以外のインバウンド市場の重要性がさらに高まるものと考えられる。

一方、九州内での訪日外国人旅行者の訪問先について全国都道府県別の訪問率からみると、福岡県が全国7位の8.7%と最も高く、その他の県との大きな開きがみられる(図3)。すなわち、九州内でのインバウンド観光は、福岡県に集中している傾向にあるといえるだろう。このような旅行者の一極集中がもたらす弊害として、近年オーバーツーリズム問題が指摘されており、観光庁も、持続可能な観光先進国に向けた今後の取り組みのひとつとして観光需要の分散化を掲げている(国土交通省観光庁、2019)。今後、新型コロナウイルス収束に伴い入国規制が緩和されれば、外国人観光客の回復も見込まれ、再びオーバーツーリズムへの対応が迫られることが予想される。このような状況を鑑みると、福岡県以外の他の地域に観光需要を分散させることが、新型コロナウイルス収束後の九州観光をさらに活性化させてい

くために望ましいといえる。

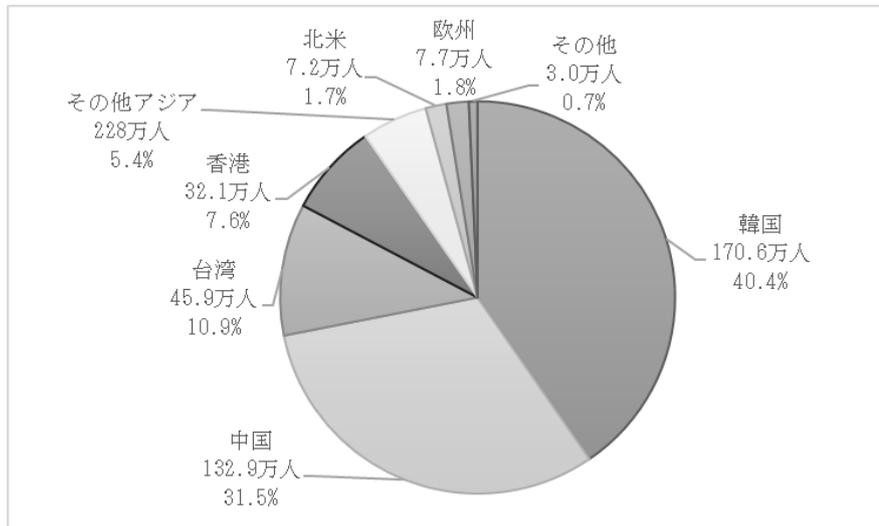
そこで本稿では、このような九州におけるインバウンド観光の2つの課題を踏まえ、九州内における観光需要分散の対象地域のひとつとして佐賀県神埼市に着目し、日本在留外国人を対象とした調査をもとに、新たなインバウンド市場を開拓していくための課題について検討する。

図1 九州への外国人入国者数の推移（単位：千人）



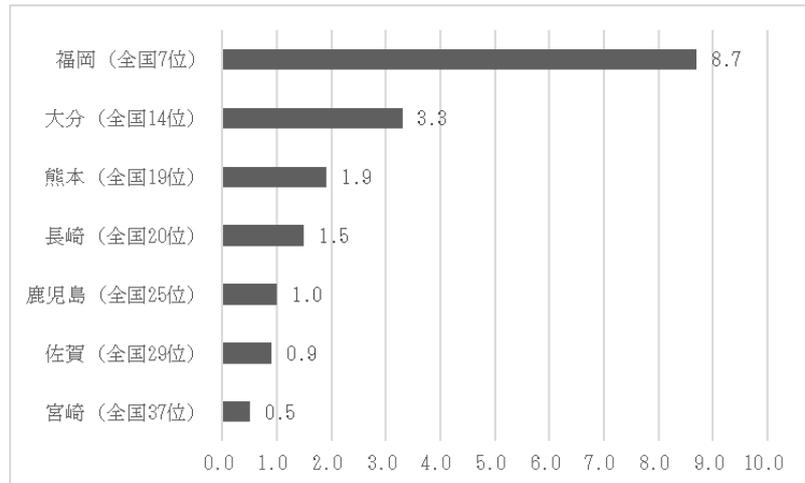
出所：国土交通省九州運輸局（2020）に基づき筆者作成

図2 九州への外国人入国者数の国・地域別内訳（2019年）



出所：国土交通省九州運輸局（2020）に基づき筆者作成

図3 九州における訪日外国人の県別訪問率（2019年）（単位：％）



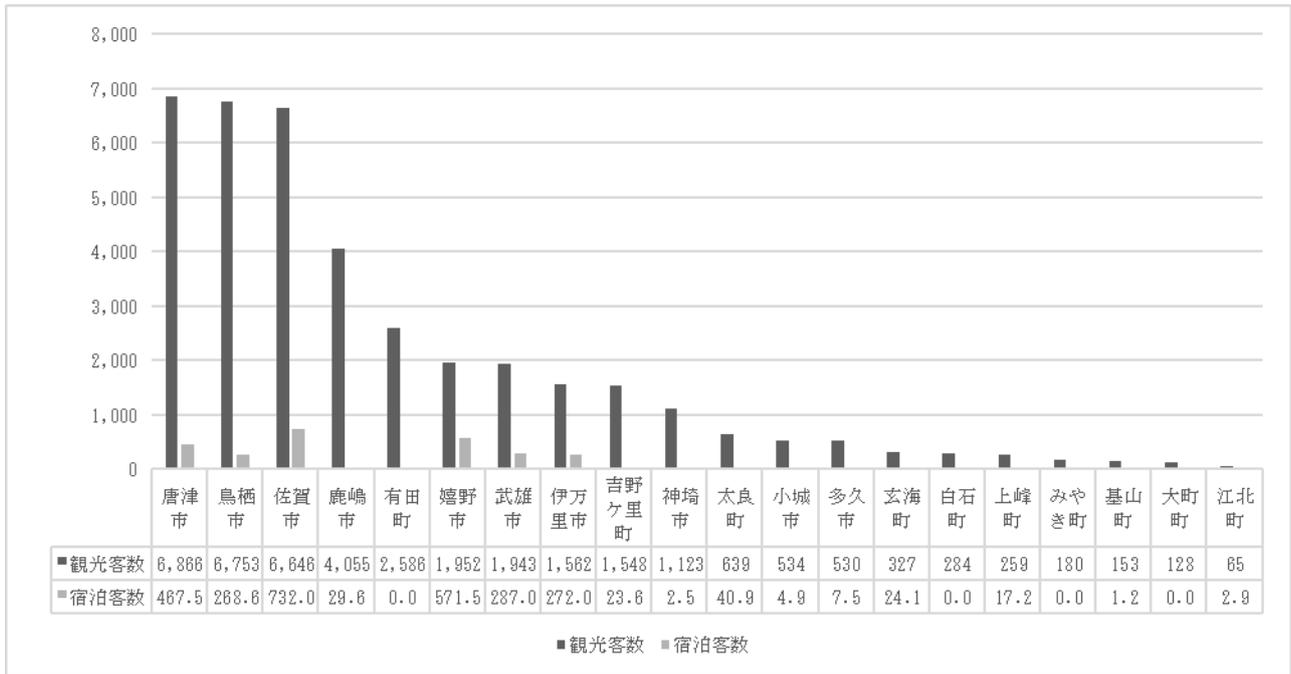
出所：日本政府観光局（2020）に基づき筆者作成

## 2. 佐賀県神埼市における観光の現状について

神埼市は佐賀県の東部に位置する人口 3.1 万人の地方都市である（神埼市、2020）。東は神埼郡吉野ヶ里町および三養基郡みやき町、北は佐賀市三瀬村および脊振山地を隔てて福岡市、南は筑後川を挟んで福岡県久留米市、西は佐賀市と隣接しており、緑豊かな環境が広がっている。神埼市の観光名所として知られているのが、明治時代に建てられた佐賀の実業家伊丹弥太郎の別荘と庭園「九年庵」で、国の名勝にも指定されている。九年の歳月を費やして築造されたことから九年庵と呼ばれ、園内は、庭一面にコケが広がり、その上はモミジやツツジなど約 60 種 700 本の樹木で彩られているのが特徴である。特に秋には美しい紅葉が楽しめることから、1988 年から毎年紅葉の時期に限り一般公開されており、九州各地また全国からバスツアーなどを利用し多くの観光客が訪れている。また、2010 年からは春（5 月）の新緑の時期にも一般公開されるようになってきている。その他の観光名所としては、弥生時代の集落跡である吉野ヶ里遺跡の展示体験施設「国営吉野ヶ里歴史公園」が隣接する吉野ヶ里町にまたがって存在しており、修学旅行や学習遠足、また家族連れなどでにぎわっている。

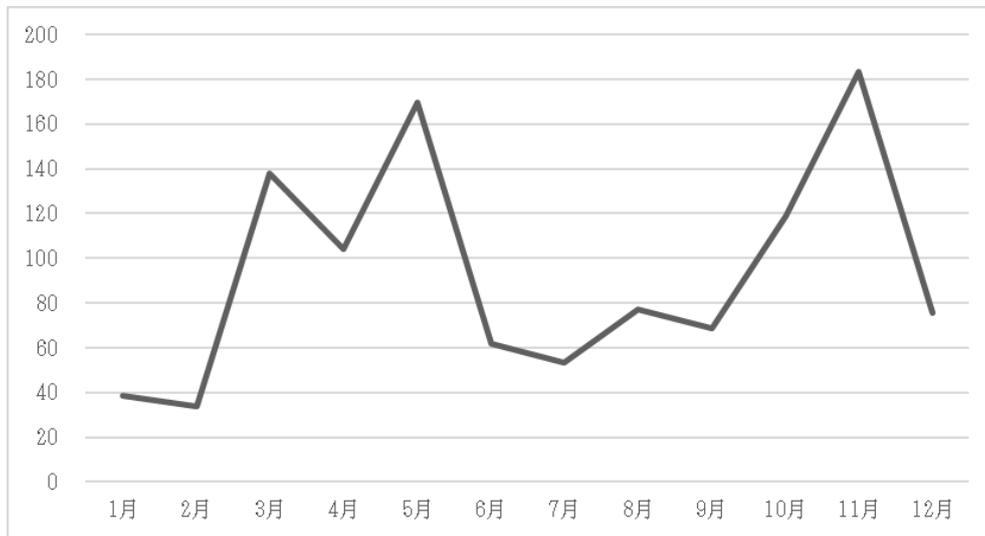
神埼市の観光の現状についてみると、2018 年の観光客数 112.3 万人であり、これは県内 20 の自治体の中で 10 位であった（図 4）。ただ、このうち市内に宿泊した人はわずか 2.5 万人であり、ほとんどすべてが日帰り客である。また、月別観光客数では、九年庵が一般公開される 11 月、そのほか 3 月と 5 月と特定の時期に偏っていることがわかる（図 5）。今後、年間を通じて観光客に訪れてもらい、また滞在時間を延ばしていくためには、神埼市の主要資源である九年庵について、新たなターゲット層である外国人旅行者にアピールしていくことや、また吉野ヶ里歴史公園など他の資源・地域とも連携したうえで、九年庵の春・夏期以外の観光活用法について検討する余地があるだろう。特に前項で述べた通り、東アジア圏以外の外国人旅行者に着目し、彼らに向けて九年庵をアピールしていくことは、今後の九州観光において新たな流れを創出するものと期待できる。

図4 佐賀県市町別観光客数と宿泊客数（2018年）（単位：千人）



出所：佐賀県地域交流部観光課（2020）に基づき筆者作成

図5 神埼市の月別観光客数（2018年）（単位：千人）



出所：佐賀県地域交流部観光課（2020）に基づき筆者作成

### 3. アンケート調査の概要と結果

#### 3.1 回答者の特徴

本稿では、2020年7月に実施した「佐賀県神埼市の観光に関するアンケート調査」より、東アジア圏以外の日本在留外国人の回答を抽出し、その結果を基に佐賀および九年庵の観光における課題を考察し

ていく。調査では、日本での観光行動一般、また佐賀及び神埼市の観光に関して質問を行った。抽出された回答者数は54であった。

まず回答者の特徴について、年齢分布は20代(50.0%)と30代(40.7%)が中心であり、これらが全体の約9割を占めていた(表1)。平均年齢は31.6歳であった。また、回答者の職業については留学生が49人であり、全体の90.7%であった。その他は、研究職(2名)、民間企業(1名)、公務員(1名)、無職(1名)である。

表1 アンケート回答者の年齢分布

	人数	%
20代	27	50.0
30代	22	40.7
40代	4	7.4
50代	1	1.9
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

回答者の居住地分布は、福岡県が28人(51.8%)で最も多く、その他九州各県(長崎県、大分県、宮崎県、佐賀県、鹿児島県)を含めると全体の約8割(77.8%)であった(表2)。九州以外の内訳としては、北海道、東京都、大阪府、福井県であった。

表2 アンケート回答者の居住地分布

	人数	%
福岡県	28	51.9
長崎県	6	11.1
大分県	3	5.6
宮崎県	3	5.6
佐賀県	1	1.9
鹿児島県	1	1.9
九州以外	4	7.4
不明、無回答	8	14.8
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

回答者の出身地域は、アフリカが17人(31.5%)、南アジアが15人(27.8%)、東南アジアが10人(18.5%)、その他が12人(22.2%)であった(表3)。具体的な国名については、アフリカ地域では、ケニア、コンゴ民主共和国、ガーナ、マラウイ、モザンビーク、ルワンダ、スーダン、タンザニア、ガンビア、ウガンダ、南アジアでは、アフガニスタン、バングラデシュ、インド、スリランカ、東南アジアではカンボ

ジア、インドネシア、ラオス、ミャンマー、ベトナムが挙げられた。その他の国々としては、ドミニカ共和国、カザフスタン、ニカラグア、ニュージーランド、シリア、トンガであった。

表3 アンケート回答者の出身地域分布

	人数	%
アフリカ	17	31.5
南アジア	15	27.8
東南アジア	10	18.5
その他	12	22.2
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

### 3.2 観光行動一般について

#### (1) 過去1年間の旅行経験

前年（2019年）1年間の国内旅行回数については、全く出かけていない人が21人（38.9%）と最も多かった（表4）。一方、出かけた人については、3～5回程度が最も多く12人（22.2%）、次いで1回が11人（20.4%）、2回が9人（16.7%）となっている。また、旅行に出かけた人に対し、その主な同行者を尋ねたところ、友人が16人（48.5%）と約半数を占めていた（表5）。その他としては、学校・職場などの団体8人（24.2%）、同行者なしが5人（15.2%）であった。さらに、国内宿泊旅行に費やした金額については、1年間で51～100米ドルが9人（27.3%）で最も多く、50米ドル以下が8人（24.2%）と続いている（表6）。最も高い金額は2,600米ドルであった。また、新型コロナウイルス感染症が克服された後の旅行に対する態度について尋ねたところ、感染症流行以前ほど旅行には出かけないだろうと回答した人が30人（55.6%）で半数以上を占めた（表7）。

表4 前年1年間の国内旅行回数

	人数	%
0回	21	38.9
1回	11	20.4
2回	9	16.7
3～5回程度	12	22.2
6回以上	1	1.9
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表5 旅行の主な同行者

	人数	%
友人	16	48.5
学校・職場などの団体	8	24.2
なし	5	15.2
家族	3	9.1
その他	1	3.0
合計	33	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表6 国内宿泊旅行に費やす平均金額（年間1人当たり）

	人数	%
50米ドル以下	8	24.2
51～100米ドル	9	27.3
101～200米ドル	4	12.1
201～500米ドル	4	12.1
501米ドル以上	3	9.1
無回答	5	15.2
合計	33	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表7 新型コロナウイルス収束後の観光行動に対する考え

	人数	%
感染症流行以前の計画のまま変わらない	4	7.4
感染症流行以前の計画以上に積極的に観光地を訪問する	7	13.0
感染症流行以前ほど旅行には出かけない	30	55.6
どちらとも言えない	7	13.0
わからない	6	11.1
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

## (2) 観光における交通利用

観光の際に訪問先で利用する交通手段についてみると、電車が34人、路線バスが33人と公共交通が上位に挙がっている（表8）。その他、徒歩（19人）、自転車（10人）ツアーバス（10人）

と続く。

表 8 観光訪問先で利用する交通手段（複数回答）

	述べ人数
電車	34
路線バス	33
徒歩	19
自転車	12
ツアーバス	10
自家用車	7
タクシー	4
レンタカー	4

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

参考までに、日常生活で利用する交通手段に尋ねたところ、自転車が最も多く（45人）、徒歩（35人）、路線バス（30人）、電車（27人）と続いていた（表9）。なお、あわせて、自動車運転免許の保有について尋ねたところ、保有していると答えた人は8人（14.8%）であった（表10）。このことから、回答者の日常での交通手段として自家用車は自転車、徒歩、公共交通機関が主であり、観光においてもほぼ同様の傾向にあることがわかる。

表 9 日常生活で利用する交通手段（複数回答）

	延べ人数
自転車	45
徒歩	35
路線バス	30
電車	27
自家用車（家族等の運転含）	2
タクシー	1

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 10 自家用車および自動車運転免許の保有

	人数	%
いずれもなし	46	85.2
免許のみ	8	14.8
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

さらに、ウォーキングの習慣についても質問を行ったところ、日常的に歩いたりウォーキングをしたりする習慣があると答えた人が47人(87.0%)であった。ウォーキングの習慣がある人にそのおよその時間を尋ねたところ、最も多かったのが31～60分であり、21人(44.7%)が該当した。続いて、30分以下が11人(23.4%)、61～120分が7人(14.9%)、121分以上が5人(10.6%)となっている。

表 11 日常的なウォーキングの習慣

	人数	%
ある	47	87.0
なし	7	13.0
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 12 1日のウォーキング時間

	人数	%
30分以下	11	23.4
31～60分	21	44.7
61～120分	7	14.9
120分以上	5	10.6
無回答	3	6.4
合計	47	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

### (3) 観光旅行において重視する項目

日本国内での観光旅行に出かける際、目的地の選択において重要視する項目について尋ねた。最も多かったのが、「現地での交通の良さ」であり、46名が回答している(表13)。続いて、「観光地(現地)へのアクセス」(38人)、「現地で散策できる」(29人)、「wi-fi環境が整っている」(24人)となっている。また、新型コロナウイルスの世界的流行という状況を反映して、「感染症対策が整っている」についても10名が重要視すると回答した。「その他」の回答には、「英語の通訳または案内が利用できること」(3人)、「安全性」(1人)が挙げられた。

表 13 観光目的地選択の際に重視する項目（複数回答）

	延べ人数
現地での交通手段の良さ	46
観光地（現地）へのアクセス	38
現地で散策できる	29
Wi-Fi 環境が整っている	24
キャッシュレス決済ができる	10
感染症対策が整っている	10
口コミサイトなどが充実している	1
その他	4

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

### 3.3 佐賀への観光について

まず、これまで佐賀を訪れたかどうか尋ねたところ、回答者の約 6 割 (33 人) が 0 回であった (表 14)。一方、佐賀を訪れたことがある人にその回数を尋ねたところ、最も多い回答は 1 回 (12 人、22.2%) であった。また、佐賀来訪の際に訪れた場所については、バルーンフェスタ (12 人)、唐津くんち (11 人) が上位に挙がり、続いて鳥栖アウトレット (7 人)、有田陶器市 (5 人) などが見られた (表 15)。なお、神埼市の九年庵については、訪れた人はいなかった。

表 14 佐賀への訪問回数

	人数	%
0 回	33	61.1
1 回	12	22.2
2 回	3	5.6
3～5 回程度	4	7.4
居住、通勤・通学経験がある	2	3.7
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 15 佐賀での訪問先（複数回答）

訪問先	延べ人数
佐賀インターナショナルバルーンフェスタ	12
唐津くんち	11
鳥栖プレミアムアウトレット	7
有田陶器市	5
嬉野・武雄温泉	4
祐徳稲荷神社	4
御船山楽園	4
吉野ヶ里歴史公園	3
呼子	0
九年庵	0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

### 3.4 九年庵への観光について

#### (1) 九年庵に対する認識

調査では、回答者に九年庵を紹介する約3分半の動画を視聴してもらい、その後動画および九年庵に関連する質問を行った。動画は、九年庵の全景および内部の映像を中心に、周辺の空撮映像、周辺観光スポット（吉野ヶ里遺跡、仁比山神社）の画像、マップおよびアクセス情報で構成されているものである。まず、本調査以前に九年庵を知っていたかについては、約9割の48人が「知らなかった」と回答した（表16）。知っていた人の中でも、「名前を知る程度」が4人、「少し知っていた」が2人であり、九年庵について詳しく知っている回答者はいなかった。

表 16 九年庵に対する認識

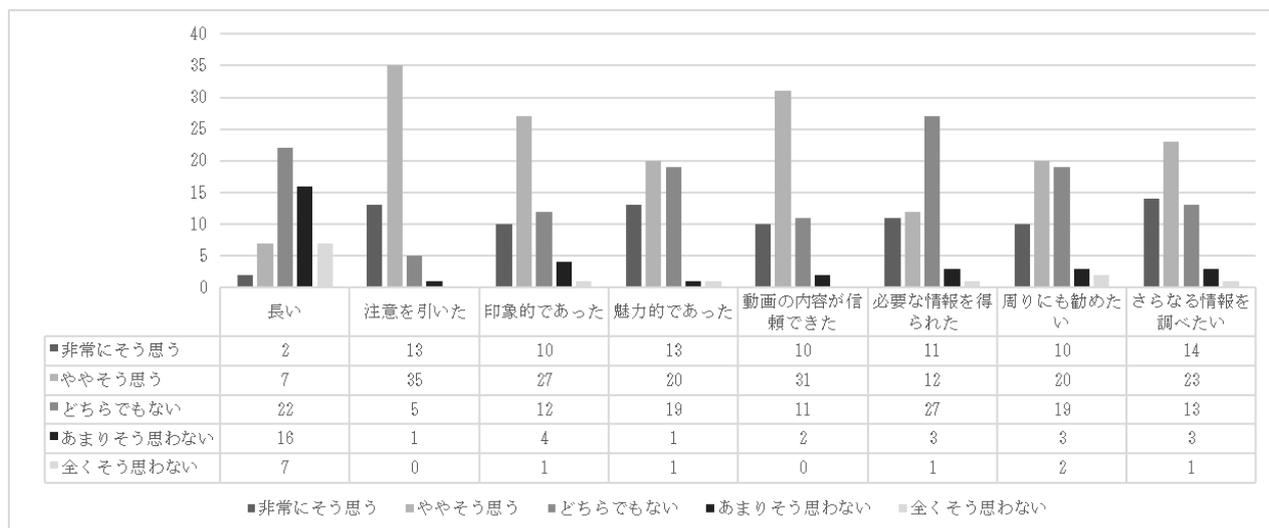
	人数	%
知らなかった	48	88.9
名前を知る程度	4	7.4
少し知っていた	2	3.7
詳しく知っていた	0	0.0
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

また、動画についての印象を尋ねた結果が図6である。まず「長い」については、「どちらでもない」と回答した人が22人（40.7%）と最も多かった。また「注意を引いた」「印象的であった」については、いずれも「ややそう思う」が最も多く、それぞれ35人（64.8%）、27人（64.8%）となっている。また、

動画の情報に関しては、「動画の内容が信頼できた」については、「ややそう思う」が31人（57.4%）で最も多かった一方、「必要な情報を得られた」については「どちらでもない」と回答した人が27人（50.0%）であった。今回調査で使用した動画にはアクセス情報以外に対象についての説明はほとんど含まれていなかった。そのため、「さらなる情報を調べたい」については「ややそう思う」が23人（42.6%）と最も多い回答となった。また、「周りにも勧めたい」については、「ややそう思う」（20人）、「どちらでもない」（19人）に回答が集まっていた。これらの結果より、動画によって対象への興味・関心は喚起されたものの、強いインパクトを与えるまでには至っていないといえる。

図6 九年庵紹介動画についての印象（単位：人）



出所：アンケートデータに基づき筆者作成

## (2) 九年庵への訪問意向

動画を見て、九年庵および周辺地域に旅行で訪れてみたいと思ったどうかをたずねたところ、「とてもそう思う」と回答した人が14人（25.9%）、「そう思う」が26人（48.1%）、「ややそう思う」が4人（10%）という結果であった（表17）。おおむね肯定的な回答ではあるものの、それほど強い来訪意志ではないといえる。また、「全くそう思わない」と回答した人が4人いた。なお、加えて理由を自由回答で尋ねたところ、肯定的な回答としては、「自然豊かで美しい」（11件）、「静かで安らげる雰囲気」（10件）、「日本の歴史・文化に関心がある」（8件）、「建築が興味深い」（3件）などが主に挙げられた。また、「九年庵の由来などについてもっと知りたい」という回答も4件あった。一方、否定的な意見としては、「特徴や魅力がない」（5件）、「九年庵以外に訪れる場所がなさそう」（4件）、「交通の便が悪い」（2件）などが挙げられた。

表 17 九年庵および周辺地域への訪問意向

	人数	%
とてもそう思う	14	25.9
そう思う	26	48.1
ややそう思う	10	18.5
全くそう思わない	4	7.4
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

あわせて、神崎市やその周辺に観光で訪れるとした場合の宿泊意向について質問を行った。その結果、「日帰りするので宿泊はしない」と回答した人が10人（18.5%）で最も多かった。また宿泊意向を示した人に希望する宿泊地について尋ねたところ、佐賀市が最も多く10人（18.5%）であり、神崎市と回答した人よりも多い結果となった。また、長崎県、福岡県、熊本県など佐賀県外を希望する人も合わせて21名（38%）みられた。

表 18 神崎市への宿泊観光意向及び希望する宿泊地

	人数	%
日帰りするので宿泊はしない	10	18.5
神崎市	7	13.0
佐賀市	10	18.5
上峰町・吉野ヶ里町	1	1.9
嬉野温泉・武雄温泉	5	9.3
唐津市	0	0.0
長崎県内	9	16.7
福岡県内	6	11.1
熊本県内	4	7.4
上記以外の九州内	0	0.0
九州外	2	3.7
合計	54	100.0

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

### (3) 九年庵の観光活用

現在、九年庵に入園できるのは、春と秋の一般公開期間の限られた時間帯（8：30～16：00）のみで、

美化協力金という名目で400円の入園料を支払うことになっている。そこで、この時期以外の観光活用法の可能性について検討するため、有料でこの期間・時間帯以外に入園できる3つのパターンを設定し、それぞれの訪問意向に関する質問を行った（表19）。その結果、「周辺の提携宿泊施設の宿泊客限定で、早朝（午前8時前）・薄暮（午後4時以降）の入園が可能となる」場合に参加してみたいと回答した人は27人で全体の50.0%、「年間を通じ郷土史等の生涯学習講座を受講することを条件に、一般公開期間外の入園が可能となる」場合に参加してみたいと回答した人が17人（全体の31.4%）、「ボランティアで施設の清掃に協力することを条件に、早朝（午前8時前）・薄暮（午後4時以降）の入園が可能となる」場合に参加してみたいと回答した人が16人（全体の29.6%）であった。

表19 九年庵への入園パターンと訪問意向（複数回答）

入園パターン	延べ人数
周辺の提携宿泊施設の宿泊客限定で、早朝（午前8時前）・薄暮（午後4時以降）の入園が可能となる。	27
年間を通じ郷土史等の生涯学習講座を受講することを条件に、一般公開期間外の入園が可能となる。	17
ボランティアで施設の清掃に協力することを条件に、早朝（午前8時前）・薄暮（午後4時以降）の入園が可能となる。	16

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

さらに、観光活用の際の具体的な料金についても検討を行うため、九年庵および周辺観光の費用負担に関して質問を行った。ここでは、仮想評価法（CVM：Contingent Valuation Method）のダブルバウンド方式（二段階二肢選択方式）を採用し、九年庵に入園できる仮想の条件、また周辺観光に関する仮想の条件をそれぞれ設定し、それに応じた支払い意志額について質問を行った。各設問文は以下の通りである。

【九年庵に関する設問】現在、九年庵には春と秋の一般公開期間に入園料400円で、順路に沿って庭園を約30分で見回れます。九年庵の庵を改修し、庵でお茶を飲みゆっくり鑑賞できるメニューを作った場合、入場料〇〇円で入場しますか。

【周辺観光に関する設問】吉野ヶ里公園、九年庵と近くの嘉瀬川ダムをめぐる緑と水の日帰りバスツアー料金が10,000円の場合、このバスツアーに参加しますか（博多駅発着の日帰り旅で、昼食代を含みます）。

これらの設問について、1回目の提示額に対する支払いに賛成した回答者にはさらに高い金額を、1回目の提示額への支払いに反対した回答者にはより低い金額を提示した。提示する金額は各設問で3パターン用意した。各設問の提示額及び回答を表20～21に示す。

得られた回答をもとに、対数線形ロジットモデルを用いて支払い意志額の推定を行った。推計にあた

っては、栗山（2012）の CVM 計算ツールを用いた。推計結果から、支払い意志額は、九年庵入園については、中央値、すなわち回答者の半数の回答者が支払ってもよいとする額が 2,690 円であった。また平均値は、裾切りなしの場合 3,646 円、最大提示額で裾切りした場合が 2,898 円であった。一方、周辺観光については、推定された支払い意志額の中央値が 15,268 円、平均値が 18,470 円（裾切りなし）、15,842 円（裾切り）であった。

表 20 九年庵に関する設問の提示額と回答

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	標本数計
2,000 円	3,000 円	1,000 円	2	7	1	3	14
3,000 円	4,000 円	1,500 円	5	7	5	5	22
4,000 円	5,000 円	2,000 円	3	6	4	5	18

注：T1=最初に示された金額、TU=最初の提示額に「入場（参加）する」と答えた人への 2 回目の提示額、TL=最初の提示額に「入場（参加）しない」と答えた人への 2 回目の提示額、YY=最初と 2 回目両方の提示額に「入場（参加）する」と答えた人数、YN=最初の提示額に「入場（参加）する」、2 回目の提示額に「入場（参加）しない」と答えた人数、NY=最初の提示額に「入場（参加）しない」2 回目の提示額に「入場（参加）する」と答えた人数、NN=最初と 2 回目両方の提示額に「入場（参加）しない」と答えた人数

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

表 21 周辺観光に関する設問の提示額と回答

T1	TU	TL	YY	YN	NY	NN	標本数計
10,000 円	20,000 円	5,000 円	2	8	1	3	14
15,000 円	20,000 円	10,000 円	5	7	5	5	22
20,000 円	25,000 円	15,000 円	3	6	4	5	18

注：表内の記載については表 20 と同じ

出所：アンケートデータに基づき筆者作成

#### 4. おわりに

本稿では、佐賀県神埼市の観光に関するアンケート調査から、東アジア圏以外の日本在留外国人の回答を抽出し分析を行ってきた。最後にこれらの結果をもとに、今後神埼市が、新たなインバウンド市場を拡大し、九州内における観光需要分散の受け皿となるための課題について検討する。

第 1 の課題は、観光目的地としての知名度の向上である。本調査では、回答者の約 8 割が九州内に在住していたにもかかわらず、全体の 6 割がこれまで佐賀県に訪れた経験がなかった。また、訪れた人の訪問地をみると、イベントや祭りのような季節的行事、また商業施設のような地域性の薄いものが上位に挙がっており、自然や温泉など佐賀が有する基本的な観光資源について、在留外国人にはまだ十分ア

ピールされていないと考えられる。九年庵についてもほぼ9割が知らなかったと回答していた。そのため、まずは彼らの旅行先選択の際の地名集合そして考慮集合に神崎市が含まれるよう、観光目的地としての情報提供を積極的に行っていく必要があるだろう。そこで有効なのは、その資源の背景をストーリーとして伝えていくことであろう。本調査では映像を使った情報提供を行ったが、調査結果をみると、映像により、回答者の九年庵及び周辺地域に対する興味、関心を喚起することができ、さらに詳しい情報を求める態度を引き出すことができた。具体的には、九年庵の由来や周辺の観光情報などについての情報を求める声があった。そこで、まずは映像などを用いて神崎市の観光目的地としての存在を認知させ、次の段階として、地域の歴史や楽しみ方などの具体的な情報をストーリーとして伝えていくことが有効であろう。

第2に、交通アクセスに関する工夫である。調査の結果にもあったように、在留外国人の日常的な交通手段は自転車や徒歩、また公共交通が主であり、観光においてもその傾向は変わらないようであった。つまり、自家用車でしかアクセスできないようなところは、旅行先としてそもそも選択されにくいといえ、これは観光目的で訪れた外国人も同様であるだろう。本調査においても、日本国内での観光目的地の選択においてアクセス面を重要視するという回答が最も多く、インバウンド観光、とくに個人旅行の傾向が高い東アジア圏以外の旅行者に対しては、交通の利便性は最も重要な要素であるといえよう。ただ、地域が新たに交通インフラを整備するなどといったことは非現実的であるため、現在の地域内における交通インフラを組み合わせ、観光客の目線で魅力あるものとして提案するというのであれば可能であろう。例えば、一般的には不便とみなされる地域の路線バスのようなものでも、外国人旅行者が日本の生活文化を体験するためのアトラクションとして位置づけることで、魅力的な観光資源の一部となるかもしれない。また、調査の結果から、日常的に歩く習慣のある在留外国人が多いことも明らかになっており、あえて地域内を歩いて移動してもらうという提案をすることで、交通アクセスの不便さを、ウォーキングという観光目的の一つに転換することも可能であろう。このように様々な工夫により、交通アクセスに関する課題に取り組んでいくことが必要である。

第3の課題は、神崎市の主要観光資源である九年庵のさらなる観光活用の検討である。本調査において、回答者が九年庵に対して観光資源としての魅力を感じていたことは見えてきたが、実際の行動に結びつくような強い関心までは見出すことができなかつたといえる。その理由として、回答にもあったように、映像だけでは他の同様の資源と比較した際の特別感が見いだせない、すなわち観光資源としての差別化が十分にできていないことが挙げられるであろう。そこで、九年庵の魅力をさらに高めるには、九年庵の特徴と周辺の地域性を生かした観光プログラムを提案することが考えられる。九年庵の由来や建物の特徴を生かした九年庵ならではの日本文化体験プログラムを提供することや、民泊などを活用し周辺地域に滞在する地方生活体験の一部に組み込むなど、九年庵の特徴と周辺の地域性を生かした様々な展開が考えられるであろう。調査においても、九年庵そのものの魅力に加え、周辺の自然環境や雰囲気に魅力を感じたとの回答が多くみられ、現地での体験についても、ある程度のお金を払ってでも参加してみたいという意向が明らかになっている。このように、現在は特定の時期にしか観光活用されていない九年庵であるが、さらに魅力ある観光資源として多様な可能性を持ち合わせているといえる。このような地域性を生かしたプログラムであれば、比較的小規模ながらも年間を通じた展開が可能であり、

環境容量内で持続可能な観光を実現していくことができるだろう。

最初にも述べた通り、今後の九州における観光の課題として、東アジア圏以外のインバウンド観光市場を開拓していくこと、また九州内の観光需要の分散化を図ることが指摘されているが、佐賀県神崎市は、これらの課題を踏まえ、新たなインバウンド観光を展開できる可能性を持つ地域であることが、本調査より示唆された。本調査結果を参照することで、東アジア圏以外の人々を直接的にターゲットとしていく際の観光マーケティングにおけるヒントが得られると同時に、日本在留外国人をターゲットとした戦略にも役立てることができるだろう。つまり、まずは在留外国人をターゲットとした観光マーケティングを展開し、訪日外国人旅行者に対するインフルエンサーとしての役割を果たしてもらうことも可能であろう。今回の調査では限られたサンプルによる探索的な分析となったが、今後さらに調査を拡大することで、神崎市における今後の観光の展開方法についてより具体的な示唆が得られるものと期待される。

## 参考文献

神崎市（2020）「佐賀県神崎市 人口・世帯数」

([https://www.city.kanzaki.saga.jp/site\\_files/file/2020/202010/p1ejjg13i5deollo7mg118h1h1d4.pdf](https://www.city.kanzaki.saga.jp/site_files/file/2020/202010/p1ejjg13i5deollo7mg118h1h1d4.pdf))

九州観光推進機構（2020）「2019 年度事業実施報告」(<https://welcomekyushu.jp/kaiin/abouts/jigyo2019.pdf>)

栗山浩一（2012）「Excel でできる CVM Version4.0」(<http://kkuri.eco.coocan.jp/>)

国土交通省観光庁（2019）「持続可能な観光先進国に向けて」(<https://www.mlit.go.jp/common/001293012.pdf>)

国土交通省九州運輸局（2020）「九州への外国人入国者数の推移」(<https://www.tb.mlit.go.jp/kyushu/content/000160237.pdf>)

佐賀県地域交流部観光課（2020）「平成 30 年佐賀県観光客動態調査」

([https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00362356/3\\_62356\\_173094\\_up\\_ue5mb4s4.pdf](https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00362356/3_62356_173094_up_ue5mb4s4.pdf))

日本政府観光局（2020）『訪日旅行データハンドブック 2020』([https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/jnto\\_databook\\_2020.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/jnto_databook_2020.pdf))